

希望

この手に

沖縄の貧困・子どものいま

第3部⑫

大阪・CPAO



「おかわりあるよ」「よっしゃー」。食卓を囲み子どもたちの元気な声があふれるCPAOの「ほんま会」(大阪府)

人は楽しみに言ってく。正式名称は「大阪子どもの貧困アクショングループ」。外向けには現実を知ってほしいと「貧困」を入れたが、当事者にとって気持ちのいい言葉ではない。だから拠点の看板は、かわいいうらすと「CPAO」の文字のみ。「2日に1回食べられれば何とかなる」とここで週3回の

一人きりの子育てをしていた母親がどれほどと苦しかったか。母子の遺体が並んだ状態で見つかった13年の事件。室内に残されていた「食べさせ」てあげられず「めんね」とのメモを、母親はどんな思いで書いたのか。子どもはどれほど空腹だったか。

「食べ物の量も少ない。多過ぎる一方で、心ある人はいるし、物は余っている。食べ物に困窮している」といふ。食への物量もものすごい。

さん。「社会の意識や制度を変え、安定した生活ができるよう国が責任を持たなければ」。養育の社会化のモデル化、政策提言といった中長期の活動目標を定め、今年2、3月に開かれた国連の女性差別撤廃委員会には日本の公的サポートの乏しさなどについて報告書を出した。学識者を招いた研究会も近々始める。

養育の社会化へ取り組み

孤立した母の味方に

「ほんま会」を聞く。集まった子どもたちは笑ったりけんかしたりしながら、スタッフと力いっぱい遊び、食卓を囲んで帰っていく。

親の味方になっていけば死なずに済んだかもしれない。自分たちがその役を果たせたらという思いは変わらない」と力を込める。

人となりが、手間を惜しまず再配分していけば、必要量を行き渡らせられる」と必要なのは「助けてと声を上げる」と、「とにかく何でもやってみる」と。ボランティアや寄付などさまざまな形でつながる支援者は300人以上になるといふ。

目を前の親子への対応から中長期的な活動まで、スタッフの1人は「人に言ってもじやないけど、むちゃくちゃ忙しいのは事実」と苦笑する。「子どもや生活の子は一番に削られ、どうやって子どもを育てるか。生きていくのか。みんな切羽詰ましている」と語り、慈善事業などではない。当事者としての視線を持ち続ける徳丸さん。

結成のきっかけになったのは大阪市内で続いた事件だ。マンションの一室で2児が餓死した2010年の事件。虐待と性暴力を受け、ケアもされないまま20代前半の若さで

SSOSは沖縄を首尾全国から寄せられる。近ければ駆け付け、役所に同行したり、子どもを預かったり、逃げれば理地の支援者につないだり、食料を送ったり。甲斐り先が

ただこれらは「ほんま会」を貼るようなもの」と徳丸

子どもを支援する。社会を見据える。(随時掲載)